

琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか? —「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—

五十嵐陽介 (一橋大学)

y.igarashi@r.hit-u.ac.jp

要旨

日本語と琉球語に関する比較言語学的研究によると、日本語と琉球語は日琉祖語 (Proto-Japonic) に遡る姉妹言語であり、両者の分岐年代は、上代日本語の話されていた奈良時代より前であると推定されるという。またこれまでに提案された系統樹によると、(議論の余地のある八丈方言を除くと) 日琉語族は「琉球語派」と「日本語派」という2大系統群から構成されるという。しかしながら、すべての現代日本語諸方言を子孫に持つ「日本語派」なる系統群は、果たして本当に存在するのだろうか。従来の研究は、すべての現代日本語諸方言の祖語 (すなわち「日本祖語」と上代日本語とを、暗に同一視しているように思われる。しかしながら、もし上代日本語に生じた言語改新を経験していない日本語諸方言が存在するならば、一部の日本語方言は上代以前に分岐したことになり、したがって上代日本語は、すべての現代日本語諸方言の祖語ではないことになる。また、すべての琉球語諸方言が共有する言語改新の多くを、日本語諸方言の一部が共有しているのならば、琉球語諸方言と当該の日本語諸方言とからなる系統群を定義しなければならず、したがって、すべての現代日本語諸方言を子孫に持つ「日本語派」なる系統群は否定されることになる。

本発表では、1) すべての日本語諸方言が共有するとみなされてきた言語改新を九州諸方言の一部が共有していない事実を報告するとともに、2) 琉球語諸方言のみが共有するとみなされてきた言語改新を九州諸方言の一部が共有している事実を報告し、3) この事実に基づいて、(日本語の) 九州方言と琉球語諸方言とからなる「九州・琉球語派」なる系統群を提案し、したがって4) 琉球語を除外し、かつすべての現代日本語諸方言を子孫とする「日本語派」なる系統群は成立しないと主張する。

1. 日本語と琉球語の系統関係に関する定説

1.1 琉球語と日本語の分岐年代 (旧説)

- 琉球語諸方言は、すべての現代日本語諸方言が失った、日琉祖語における対立を保持している (服部 1979)。
- 琉球語諸方言が保持する日琉祖語の対立の一部は、上代日本語 (8C) の時代にすでに失われた (服部 1979)。
- したがって、琉球語の分岐年代は奈良時代より前 (7C 以前) である (服部 1979; Pellard 2015)。

1.2 琉球語派と日本語派の定義 (旧説)

- 琉球語諸方言に観察され、日本語諸方言に観察されない言語改新がある。
- 日本語諸方言に観察され、琉球語諸方言に観察されない言語改新がある。
- したがって、琉球語諸方言のみを子孫とする「琉球語派」と、日本語諸方言のみを子孫とする「日本語派」が定義される (図 1)。

1.3 旧説の問題点

- 琉球語諸方言に観察され、日本語諸方言に観察されないとされてきた言語改新の一部は、日本語九州方言の一部に観察される。
- 日本語諸方言に観察され、琉球語諸方言に観察されないとされてきた言語改新の一部は、日本語九州方言の一部に観察されない。

1.4 新説

- 九州方言に観察されないが、その他の日本語諸方言に観察される言語改新がある事実は、九州方言を除いた日本語諸方言からなる系統群の存在を意味する。
- 琉球語諸方言と九州方言が特定の言語改新を共有している事実は、琉球語と九州方言からなる系統群の存在を示唆する。
- 上の2つの事実から、琉球語諸方言と九州方言からなる系統群(「九州・琉球語派」と、(少なくとも九州方言を除く)日本語諸方言からなる系統群(「中央日本語派」)が定義される (図 2)。
- したがって、すべての現代日本語諸方言を子孫に持つ「日本語派」なる系統群は成立しない。

五十嵐陽介 (2016) 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか?—「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本語学史の光と影」第3回共同研究会, 2016年8月30日, 京都: 国際日本文化研究センター.

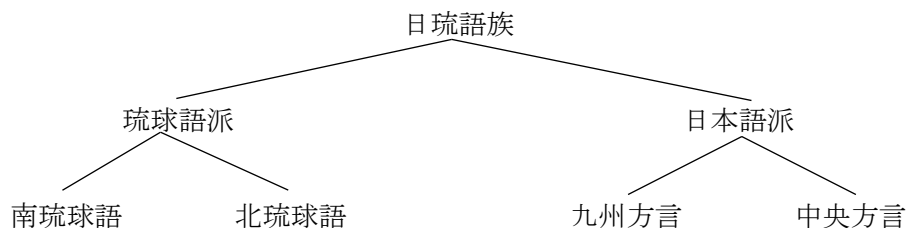


図1 旧説における系統樹. Pellard (2015)をもとに作成。一部改訂。八丈方言は省略。九州方言と中央方言以外の日本語の諸方言は省略。(もとより日本語派以下の系統関係は不明。)

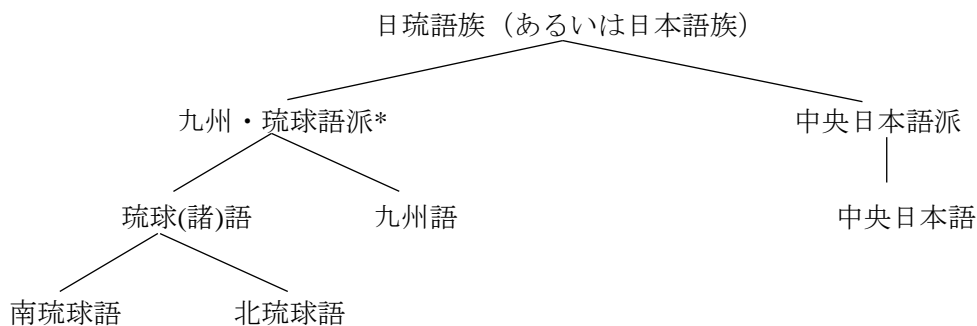


図2 本発表の提案する新しい系統樹. 「九州・琉球語派」は将来的には「南日本語派」と呼び変える必要があるだろう。注3も参照。

2. 母音*əi の変化

2.1 *oi, *ui, *əi の再建

- 日琉祖語には、現代日本語諸方言の/i/と対応する母音として、少なくとも**i*, **oi*, **ui*, **əi* が再建される(Pellard 2008, 2013, 2015)。(*e については第3節参照。)
- 琉球祖語と上代日本語、現代中央日本語の対応は以下の通りである。

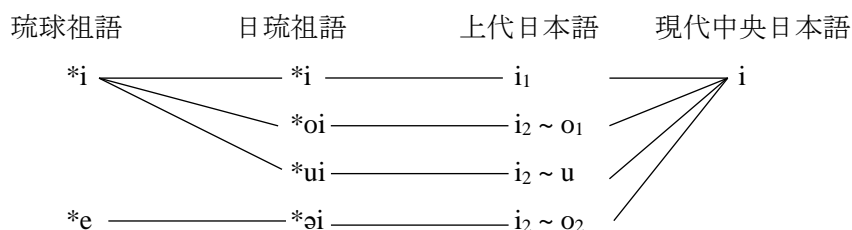


表 1 *ui と *əi の対立の保持・合流 (Pellard 2015)

	「月」	「木」
日琉祖語	*tukui	*kəi
上代日本語	tuki ₂ ~ tuku-	ki ₂ ~ ko ₂ -
琉球祖語	*tuki	*kee
諸鈍 (北琉球沖縄語)	tʰɨkʰi	kʰi:
今帰仁 (北琉球沖縄語)	eɨtei:	ki:
大神 (南琉球宮古語)	ksks	ki:
石垣 (南琉球八重山語)	tsɨki	ki:
与那国 (南琉球与那国語)	tʰi:	kʰi:

2.2 母音*əi の改新の共有

- 日本語諸方言 $*əi (> i_2 \sim o_2) > i$
- 琉球語祖語 $*əi > *e$
- 以上の改新の共有から、日本語派と琉球語派が定義される。

2.3 母音*aiの九州方言における改新

- しかしながら、*ai > *e の変化は九州方言の一部に認められる。
- *ai を含むのが確実な同源語は、いわゆる上二段活用動詞（の一部）の未然・連用語幹（例えば*okai「起き」）と、唯一の名詞語根*kai「木」のみ。
- 現代九州諸方言の一部では、上二段活用動詞の未然・連用語幹の語幹末母音は/e/であり、下二段活用動詞と区別がない。（服部 1979: 101; 上村 1983: 17）
 - oke-「起き」 ore-「降り」 ote-「落ち」など
- 上二段と下二段の「合流」は豊前、豊後、日向の方言にみられることが強調されることが多いが（上村 1983: 17）、諸県地方や吐噶喇列島の方言にもみられる。また薩摩方言にもみられるという（黒木邦彦氏, 私信）。
 - oke-n「起きなさい」<「起きない」: 鹿児島県鹿児島郡十島村中之島（橋口 2004）
 - ote-ru「落ちる」: 宮崎県北諸県郡高城町大井手（橋口 2004）
 - ore-Q ku-ru「降りてくる」: 宮崎県東諸県郡高岡町内山・浦之名（橋口 2004）
- 日琉祖語における「上二段活用動詞」の未然・連用語幹の語幹末母音として等しく*aiが再建できるのでは？
 - 中央日本語: *əkai「起き」, *ərai「降り」, *ətai「落ち」> oki, ori, oti
 - 九州方言の一部: *əkai「起き」, *ərai「降り」, *ətai「落ち」> oke, ore, ote
 - 琉球祖語: *əkai「起き」, *ərai「降り」, *ətai「落ち」> *oke, *ore, *ote
 - ◇ 語幹末母音として*uiが再建されるという上二段動詞（*sugui-「過ぎ」など）は今後の課題。
- 「木」を意味する†keは現代九州方言に確認できない。
- しかし『日本書紀』景行紀に九州の地名として「木」を含む地名（「ミケ」）が認められ ke₂（乙類のケ）で現れる。奈良時代の九州方言では ke「木」が使われており（服部 1979）、その後、中央日本語の ki「木」に取って代わられた可能性がある。

是居於御木<開>川上（景行紀十二年）
 到筑紫後筑後国御木居高田宮時有僵樹…時人歌曰、朝露のみ概のさ小橋
 まへつきみい渡らすもみ開のさ小橋…天皇曰、是樹者神木、故是国宣号
 御樹国（景行紀十八年）
 （上代語辞典編集委員会 1967, 強調筆者）
- 以上から、九州方言は中央日本語に生じた*ai (> i₂ ~ o₂) > iを経験しておらず、かわりに琉球祖語が経験したのと同じ*ai > *eを経験した可能性が高いと言える。
- したがって、九州方言は他の中央日本語から奈良時代以前に分岐したことが示唆される。また改新*ai > *eの共有から九州方言と琉球語が系統群をなす可能性が示唆される。

3. 母音*o, *e の変化

3.1 *o, *e の再建

- 日琉祖語の少数の語には母音*o と *e が再建されるという (Pellard 2008, 2013, 2015)。
 - *o : *moko 「婿」, *omi 「海」, *kusori 「薬」
 - *e : *meNtu 「水」, *memeNsV 「蚯蚓」, *keNsu 「傷」, *peru 「蒜」, *peNsi 「肘」, *erə 「色」
- 琉球祖語と現代中央日本語の対応は以下の通りである。

琉球祖語	日琉祖語	上代語	現代中央日本語
*e	————— *e	————— i ₁	————— i
*o	————— *o	————— u	————— u

3.2 母音*o, *e の改新の共有

- 日本語諸方言 *e > i, *o > u
- 琉球祖語 変化なし
- この改新の共有から、琉球語諸方言を除外した日本語派が定義される。

3.3 母音*o, *e の九州方言における保持

- しかしながら、*e > i, *o > u の変化は九州方言（主として鹿児島方言）の一部が、一部の語において共有していない。
 - *moko 「婿」: moko 「婿」 鹿児島県種子島（植村 2001）
 - *omi 「海」: omi 「海」 鹿児島県種子島（上村 1959）
 - *meNtu 「水」: mezu 「水」 鹿児島県薩摩郡鹿島村藺牟田（橋口 2004）
 - *memeNsV 「蚯蚓」
 - memeNziro 「蚯蚓」 鹿児島県揖宿郡穎娃町（橋口 2004）
 - memenzo 「蚯蚓」 鹿児島県阿久根市（橋口 2004）
 - memenzuu 「蚯蚓」 鹿児島県出水市（橋口 2004）
 - memenzu 「蚯蚓」 鹿児島県出水市（橋口 2004）
 - memenzo 「蚯蚓」 鹿児島県日置郡伊集院町（橋口 2004）
 - memenzu 「蚯蚓」 鹿児島県出水市（橋口 2004）
 - 以上から、*e > i, *o > u の変化はすべての日本語諸方言が共有しているわけではないことが明らかになり、したがって、*e > i, *o > u の変化は「日本語派」を定義する特徴とはなりえない。
 - したがって、この変化を生じた中央日本語は、古形を保持する九州方言（および非中央系の日本語方言）から奈良時代以前に分岐したことが示唆される。

4. アクセントの変化

4.1 アクセント類の再建

- 日本語と琉球語の比較から、日琉祖語の2音節名詞には、8種類のアクセント類 (2.1, 2.2, 2.3a, 2.3b, 2.4a, 2.4b, 2.5a, 2.5b) が再建されるという (服部 1979; 松森 1998)。
- このうち 2.3b 類は所属語彙が少ないので除外すると、琉球祖語と平安時代末期の中央日本語との対応は以下のようになる。

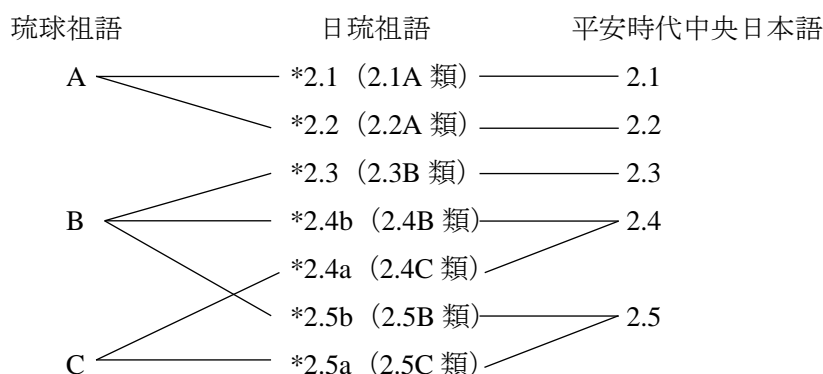


表2 日琉祖語のアクセント類とその所属語彙、および香川県伊吹島方言 (中央日本語) と今帰仁方言 (北琉球語群) のアクセント型。伊吹島方言は平安時代京都方言における類の区別を保持した方言であり、今帰仁方言は琉球祖語における類の区別と保持しているとされる方言である。

アクセント類	所属語彙	伊吹島	今帰仁
2.1 (2.1A 類)	ウオ 魚, ウシ 牛, エダ 枝, カゼ 風, コシ 腰, サゲ 酒, トリ 鳥, ハナ 鼻, ホシ 星, ミズ 水, ムシ 虫	HH	LH
2.2 (2.2A 類)	アザ 痣, イシ 石, ウタ 歌, オト 音, カワ 川, タビ 旅, ナツ 夏, フユ 冬, ムネ 胸, ムラ 村, ユキ 雪	HL	LH
2.3 (2.3B 類)	イヌ 犬, イモ 芋, イロ 色, キモ 肝, クサ 草, クモ 雲, シマ 島, ハナ 花, マメ 豆, ミミ 耳, ヤマ 山	HM	LR
2.4b (2.4B 類)	アワ 粟, イタ 板, イネ 稲, カサ 笠, カタ 肩, カド 角, タネ 種, ナエ 苗, ハダ 肌, ミノ 蓑, ムギ 麦	LH	LR
2.4a (2.4C 類)	アト 跡, イキ 息, イト 糸, ウス 白, ウミ 海, ツチ 槌, ナカ 中, ナカ 針, ハリ 舟, フネ 篋, ヘラ 松	LH	HL
2.5b (2.5B 類)	アイ 藍, アオ 青, アセ 汗, アメ 雨, クロ 黒, コイ 鯉, シロ 白, マユ 眉, モモ 腿など	LF	LR
2.5a (2.5C 類)	オケ 桶, カゲ 蔭, クモ 蜘蛛, コエ 声, サル 猿, ナベ 鍋, マエ 前, ムコ 婿など	LF	HL

4.2 アクセント変化 (類の統合) の共有

- 日本語諸方言 {2.3}{2.4a}{2.4b}{2.5a}{2.5b} > {2.3}{2.4a, 2.4b}{2.5a, 2.5b}
- 琉球祖語 {2.3}{2.4a}{2.4b}{2.5a}{2.5b} > {2.3, 2.4a, 2.5a}{2.4b, 2.5b}
- 以上の改新の共有から、日本語派と琉球語派が定義される。

五十嵐陽介 (2016) 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか?—「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本語学史の光と影」第3回共同研究会, 2016年8月30日, 京都: 国際日本文化研究センター.

4.3 アクセント類の九州方言における保持

- しかしながら日本語諸方言が共有しているはずの変化(類の統合)は九州方言の一部(佐賀県杵島方言)に認められない(五十嵐・平子 2016)。
- 琉球語諸方言にのみ保持されているとされる{2.4a}{2.4b}の区別と{2.5a}{2.5b}の区別は、佐賀県杵島方言でも保持されている(五十嵐・平子 2016)。
- 以上から、合流{2.4a, 2.4b}と合流{2.5a, 2.5b}はすべての日本語諸方言が共有しているわけではないことが明らかになる。
- したがってこの変化(合流)は「日本語派」を定義する特徴とはなりえない。
- さらに、九州方言は中央日本語から少なくとも平安時代末期時代以前に分岐したことが示唆される。

表 3 佐賀県杵島方言における{2.4a}{2.4b}および{2.5a}{2.5b}の区別(五十嵐・平子 2016)

アクセント類	所属語彙	杵島方言のアクセント型
2.4b (2.4B 類)	(語頭無声) 肩・種・肌・屑など	HL (F型)
	(語頭有声) 苗・稲・麦・瓜など	LH (R型)
2.4a (2.4C 類)	息・舟・糸・針・臼・帯・松など	LH (R型)
2.5b (2.5B 類)	汗・雨・鯉・腿・黒・白など	HL (F型)
2.4a (2.4C 類)	桶・鍋・蜘蛛・声・前・婿・影・猿など	LH (R型)

5. 語形の改新

5.1 九州方言と琉球語のみが共有する語形改新

- 不規則な音変化(「音法則」によらない変化)によって語形が変化することを語形改新と呼ぶことにする。
- 以下の語は、語形改新が生じた語であるが、同じ改新を九州方言の一部と琉球語が共有している¹。
- この語形改新は他の日本語諸方言に観察されない。

日琉祖語 >	九州方言	琉球祖語	九州・琉球祖語
*? > tuba 「唇」	suba (諸県・鹿児島・)	*suba	*suba
*? > akuto 「踵」	ado (九州全土)	*ado	*ado
* > iroko 「鱗」	iriko (長崎・種子島・屋久島)	*irike	*iriko
*? > kamuge- 「頭に載せる」	kamme- (対馬・大隅・種子島)	*kame-	*kamme-
*? > ow-ase- 「負わせる」	ouse->uuse/oose (全九州的)	*ouse-	*ouse-
*ikəpi > ikoi 「憩い」	jokoi (全九州的)	*jokoi	*jokoi
*? > jama-moti 「鳥もち」	jammotei (宮崎・熊本・鹿児島)	*jammoti	*jammoti
*? > *niga-uri? 「烏瓜」	gauri > goori (全九州的)	*gauri/gaura	*gauri
*? > *nigori? 「滓」	gori (壱岐・対馬・諸県)	*gori/gore	*gori

¹ 九州方言のデータの出典は以下の通り。suba「唇」宮崎県西諸県郡(東條 1951)、鹿児島(東條 1951; 平山他 1992-93)、鹿児島県甕島(平山他 1992-93)、種子島(橋口 2004)、屋久島(橋口 2004)、吐噶喇列島(橋口 2004) / ado「踵」大分(平山他 1992-93)、宮崎(平山他 1992-93)、鹿児島(平山他 1992-93)、甕島(平山他 1992-93) / iriko「鱗・雲脂」長崎(東條 1951)、種子島(東條 1951)、屋久島(東條 1951)、kamme-「頭に載せる」対馬(東條 1951)、大隅(東條 1951)、種子島(東條 1951) / oose-「牛馬に荷を負わせる」対馬(東條 1951)、種子島(上村 1959)。use-「牛馬に荷をつける」大分(東條 1951)、長崎(東條 1951)、熊本(東條 1951)、鹿児島(東條 1951) / jokoi「休息」福岡(東條 1951)、大分(東條 1951)、熊本(東條 1951) / jammotei「鳥もち」熊本県球磨郡(日国 2000-02)。宮崎県(日国 2000-02)。鹿児島県(日国 2000-02)。gori「烏瓜」大分(東條 1951)、鹿児島(東條 1951)。goori「烏瓜」九州(東條 1951)、肥前(東條 1951)、筑後(東條 1951)、大分(東條 1951)、福岡(東條 1951)、長崎(東條 1951)、熊本(東條 1951)。goi「烏瓜」鹿児島(東條 1951) / gori「沈殿物・滓」対馬(東條 1951)、壱岐(東條 1951)、宮崎東諸県郡(日国 2000-02)。gori「くず」壱岐(日国 2000-02)。

5.2 問題の語形改新は九州・琉球語派を特徴づけるか

- 一部は単純に九州から琉球（あるいはその逆）への借用の可能性もあるが、*suba「唇」, *ado「踵」, *iriko「鱗（ふけ）」, *jokoi「休息」などは基本的な語であり、借用語の可能性は低いと思われる。
- *kamme-「頭に載せて運ぶ」に関しては、大分・熊本に kamuge-があり（東條 1951）、これが古形であろう。島根、広島には kane-があるが（東條 1951）、これは*kamuge > kene-という語形改新（九州とは異なるタイプの改新）の結果であろう。
- この8つの語形改新が、並行変化の結果（その可能性は低いだろう）でもなく、かつ借用の結果でもないのであるならば、問題の改新は、琉球語と九州方言からなる系統群を定義するものとなりうる。

6. 意味の変化

6.1 九州方言と琉球語のみが共有する意味変化

- 以下の語は、意味変化が生じた語であるが、変化の方向性が正しいのならば、問題の意味変化を九州方言の一部と琉球語とが共有していることになる。
- この意味変化は他の日本語諸方言に観察されない。

日琉祖語 >	九州方言	琉球語祖語
*? > sone「山頂付近の平坦地?」	> 「海中の魚の取れる瀬」 (杵岐・五島・甕島・屋久島)	「海中の魚の取れる瀬」
*? > *podo「程」	> 「身長」 (杵岐・佐賀・熊本・鹿児島)	「身長」
*? > *sugarV「蜂」	> 「蛸」(種子島)	「手長蛸・飯蛸」
*? > *wogi「荻」	> 「砂糖黍」(種子島・屋久島)	「砂糖黍」
*? > *ozom-「恐れる」	> 「目覚める」(九州全土)	「目覚める」

6.2 問題の意味変化は九州・琉球語派を特徴づけるか

- 問題の意味変化が並行変化でないのならば（*ozom-「恐れる」>「目覚める」はその可能性が高いか）、あるいは意味変化を起こした語の借用の結果（*wogi「荻」>「砂糖黍」などはその可能性が高いか）でなければ、九州・琉球語派を定義づける改新とみなしうる。

7. 九州・琉球同源語

7.1 九州方言と琉球語のみが共有する同源語

- 以下の同源語は、九州方言と琉球語にのみ見つかる²。

九州方言	琉球祖語
1. イヤ「胞衣」	*ija「胞衣」
2. ハベロ「蝶・蛾」	*pa-bero(?)「蝶」
3. タマシ「分け前」	*tamasi「分け前」
4. アボ「断崖」	*abo「深い縦穴」
5. アカマメ「小豆」	*aka-mame「小豆」
6. カラハイ「灰」	*kara-pai「灰」
7. ガジャブ「蚊・蚋」	*kazamV「蚊」
8. タミナ「田螺」	*ta-mina「田螺」
9. シキリ「海鼠」	*sikiri「海鼠」
10. マタバシ「股座」	*mata-basi「股座」
11. チクラ「鯰の稚魚」	*tikura「鯰の稚魚」
12. セセカウ「用事が重なる」	*sesekaw-「用事が重なる」
13. バカウ「奪い合う」	*bakaw-「奪い合う」
14. イーシ「唾者」	*iisa(?)「唾者」
15. コブ「蜘蛛」	*kobu「蜘蛛」
16. アボシ「田畑の畔」	*abosi「田畑の畔」
17. ヘグロ「鍋墨」	*peguro(?)「鍋墨」
18. チョーカ「急須・土瓶」	*tjooka「急須・土瓶」
19. メシガイ「杓文字」	*mesi-gai「杓文字」
20. バキ「叔母」	*baki「叔母」
21. バケ「蓬莱竹」	*bake「蓬莱竹製の箆」
22. フナトー「船頭」	*punatau「船頭」
23. オキバエ「南西風」	*oki-bae「南西風」
24. ダリヤメ「晩酌」	*dare-jame「晩酌」
25. コバ-ガサ「枇榔製の笠」	*koba「枇榔」
26. コガ-ヤキ「卵焼き」	*koga「卵」
27. サワリ「唐縮緬」	*sawari「唐縮緬」

7.2 問題の同源語は九州・琉球語派を特徴づけるか

- 問題の同源語が日琉祖語における古形の保持 (15-17 などはその可能性が高いか) でなく、また借用語 (18-27 など文化借用の可能性が高いか) でないのならば、九州方言と琉球語の共通祖語の段階で生じた新語ということになり、九州・琉球語派を定義づける改新とみなしうる。

² 同源語の候補を決定する際には野原(1979-1983)や伊波(1974)を大いに参考にした。しかしこれらの論文に記載された語の圧倒的多数は、中央日本語を含む他の日本語方言に在証されるものであり、日琉祖語に遡る古形である可能性が極めて高い。

8. 文法の改新

8.1 九州方言と琉球語のみが共有する文法

- 以下の形態統語論は九州方言の一部と琉球語のみが共有することが先行研究（野原(1979-1983)など）によって指摘されている。

「目的」を表す動詞形態論

root {-CVB, -NPST} - GA {-DAT, -φ}

toi-gja *it-ta.*

see.CVB-GA.DAT go-PST

「取りに行った。(取りガに行った。)」(佐賀方言)

tui-ga *if-tai.*

take.NPST-GA go-PST

「取りに行った。(取るガ行った。)」(琉球語宮古池間方言)

「～がる」を表す動詞形態論

root - SA {-DAT, -φ} do

ures-sja *si-jor-as-u*

glad-SA.DAT do.CVB-PROG-HON-NPST

「嬉しがっている。(嬉しサにしよらす。)」(佐賀方言)

kamaras-sa *hii-taana-mai* *ur-ai-ddan.*

sad-SA do.CVB-only-also be-POT-NEG.PST

「悲しがってばかりもいられなかった。

(悲しサしてばかりもいられなかった。)」(琉球語宮古池間方言)

8.2 問題の動詞形態論の共有は九州・琉球語派を特徴づけるか

- 古形でなく、かつ借用でなく、かつ並行変化でなければ、九州・琉球語派を特徴づける改新であるが、不明な点が多い。
- 九州方言と琉球方言を比較しても、動詞の伴う接辞に差異があり、完全に一致しない。
 - ◇ 佐賀方言は「取りガに行った」であるのに対して、池間方言は「取るガ行った」。
 - ◇ 佐賀方言は「嬉しサにする」であるのに対して、池間方言は「悲しサする」。
- 古形、借用、並行変化の可能性を否定できるかの検討は今後の課題。

9. 結論

9.1 要約

- 日本語諸方言が共有するとみなされてきた言語改新を九州諸方言の一部が共有していない。
- 琉球語諸方言のみが共有するとみなされてきた言語改新を九州諸方言の一部が共有している。
- これまで報告されていない九州方言と琉球語が共有する改新（語形改新、意味変化、新語発生）も数多くある。
- これらの事実は、九州方言と琉球語諸方言とからなる系統群「九州・琉球語派」の存在を強く示唆する。
- また、琉球語を除外し、かつすべての現代日本語諸方言を子孫とする「日本語派」なる系統群は成立しないことを強く示唆する³。

9.2 今後の課題

- 本発表の提案する系統樹に基づくと、琉球語とともに九州の諸方言が、奈良時代より前に、中央語から分岐したことになる。
- 中央語からの分岐後、琉球祖語話者は九州にとどまったが、10C~12Cに琉球列島に移住し、九州に残った琉球語話者は、中央日本語に言語を置き換え、九州の琉球語は痕跡を残さずに消滅したとする説（Pellard 2015）は再考すべきだろう。
- 奈良時代より前に中央語から分岐したのは、九州・琉球祖語であり、この言語は九州で話されていた可能性がある。10C~12Cに琉球列島に移住したのは、九州・琉球語派の一方言の話者であり、この話者の方言が琉球祖語である（すなわち琉球祖語の他からの分岐は琉球列島で生じた）という可能性を検討すべきであろう。したがって、現在の九州方言は、琉球祖語と姉妹関係にある言語（九州語）の末裔であり、九州における言語の取り換えは起こらなかった可能性もある。（当然、九州では中央語との激しい言語接触があったに違いないが。）
- 日本語と音対応のある琉球語における漢語の存在も、（九州で話されていた）九州・琉球祖語の段階で、中央日本語から借用された可能性がある。

³ もし琉球列島の諸方言を独立の言語とみなすのであれば、系統論の観点からは、琉球語と姉妹関係にある九州の諸方言も「九州語」として独立の言語とみなさなければならない。この場合、琉球語と日本語とを二大系統群とみなすことを含意する「日琉語族」という名称がその根拠を失うことになる。「日本語族」（日本語族琉球語、日本語族九州語、日本語族中央語など）と言い換えるか、あるいは英名の **Japonic** をそのまま用い、ジャポニック語族と呼ぶべきであろう。（これを「日本列島語族」と訳すのも一案であろう）。私見では、本発表の「九州・琉球語派」を「南日本語派」と言い換えたうえで、九州、琉球の言語を、それぞれ「日本語族南日本語派九州語」「日本語族南日本語派琉球語」と呼ぶことで、他の **Japonic** 系統の諸言語（中央語や東日本の言語）をも考慮に入れた場合、それぞれの言語に統一性のある名称を与えることが可能となる。

五十嵐陽介 (2016) 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか?—「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本語学史の光と影」第3回共同研究会, 2016年8月30日, 京都: 国際日本文化研究センター.

引用文献

- 五十嵐陽介・平子達也 (2016) 「「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で
区別される日本語本土方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較」第30回日本音声学会全
国大会, 2016年9月17日, 早稲田大学.
- 伊波普猷 (1974) 「琉球語と奄岐方言との比較対照」『伊波普猷全集』第4巻, 233-276. 東京:
平凡社.
- 上村幸雄 (1959) 「鹿児島県西之表市西之表」『日本方言の記述的研究』
- 植村雄太郎(2001) 『種子島方言辞典』武蔵野書院.
- 長田須磨・須山名保子 (共編) (1977-1980) 『奄美方言分類辞典』笠間書院.
- 生塩睦子 (2009) 『新版沖縄伊江島方言辞典』伊江村教育委員会.
- 上村孝二(1983) 「九州方言の概説」『講座方言学9—九州地方の方言』国書刊行会, pp. 1-28.
- 国立国語研究所 (編) (2001) 『沖縄方言辞典』財務省印刷局.
- 上代語辞典編集委員会 (1967) 『時代別国語大辞典上代編』三省堂.
- 東條操 (編) (1951) 『全国方言辞典』東京堂出版.
- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムズ社.
- 仲宗根政善 (2011) 『沖縄今帰仁方言辞典』角川学芸出版.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2000-02) 『日本国語大辞典: 第二版』小学館.
- 野原三義(1979-1983) 「琉球方言と九州諸方言との比較(I-V)」『沖縄国際大学文学部紀要: :
国文学篇』 8(1), 9(1-2), 10(1), 11(1-2), 12(2). ページ数省略.
- 橋口満 (2004) 『鹿児島方言大辞典 (上・下)』高城書房.
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について 21-22」『言語』 8(11): 97-107; 8(12): 504-516.
- 平山輝夫 (編) (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版.
- 平山輝夫・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉山孝夫 (1992-93) 『現代日本語方
言大辞典』明治書院.
- ペラール・トマ(2013) 「日本列島の言語の多様性—琉球諸語を中心に—」田窪行則 (編) 『琉
球列島の言語と文化—その記録と継承—』くろしお出版, pp. 81-92.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2000-02) 『日本国語大辞典: 第二版』小学館.
- 前新透 (著), 波照間永吉・高嶺方祐・入利照男 (編著) (2011) 『竹富方言辞典』南山舎.
- 松森晶子 (1998) 「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙2 拍語の特異な合流の仕方
を手がかりに—」『言語研究』 114, 85-114.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄タイムズ社.
- Thomas Pellard (2008) Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese. *Cahiers de linguistique Asie
Orientale* 37 (2): 133-158.
- Pellard Thomas (2013) Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system. In: Bjarke
Frellesvig and Peter Sells (eds). *Japanese/Korean Linguistics* 20. pp. 81-96. CSLI
Publications.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Island. In: Patrick Heinrich, Shinsho
Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and
use*, 14-37. Berlin: DeGruyter Mouton.